

<実践報告>

専門演習における受講学生の教育課題の取組みに関する報告

黒木 義成[※]

Report on the efforts of students' educational issues in specialized exercises

Yoshinari KUROKI[※]

要 約

2022年度の専門演習では、受講学生の教育課題に関する興味・関心を掘り起こし、「学校教育」「社会教育」「家庭教育」の各分野に係る課題等に視点を当てた報告を行ってきた。そして、学生が捉えた現在の現状や課題等、そして今後の方向性等について、それぞれの考えを専門演習の報告会の中で報告書としてまとめたものである。

キーワード：「学校教育」、「社会教育」、「家庭教育」

1 はじめに

3年次15名、4年次4名の合同の専門演習では、教職志望者が少なかったため、教職に関する課題への取り組みだけでなく、現代の教育課題に関する取り組みについて、幅を広げて実施することとした。その中では、特に、学生自身の興味・関心をより引き出す目的で教育課題を「学校教育」「社会教育」「家庭教育」の分野から自身で追究課題を選択し、具体的な取組み課題として調査・研究することとした。

2 授業計画

- (1) 「学校教育」「社会教育」「家庭教育」の現状と課題についての認識を深める。
- (2) 「学校教育」「社会教育」「家庭教育」の分野から一分野を選択し、追究課題を決める。
- (3) 追究課題について、まとめたことを報告し、全体での共有化を図る。

3 実践事例—授業計画—

(1) 授業概要

専門演習では、学生一人一人が、自身の追究課題をより明確にするために、「学校教育」「社会教育」「家庭教育」（以後、三分野と表記）の各分野の現状と課題について説明を行い、次のような共通確認を行った。

① 学校教育

学校教育について、ウィキペディアでは、「日本の教育において学校教育とは、狭義には、学校教育法の第1条に規定する学校（一条校）で行われるものを指す。具体的には、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学などが代表的な学校であり、6歳から15歳までの時期（学齢期）が義務教育である。」と示されている。

② 社会教育

社会教育について、ウィキペディアでは、「・・・社会において、都道府県や市町村などの自治体や公的機関、博物館、図書館、あるいは大学などが公的にだれ

[※]人文学部国際コミュニケーション学科 (Faculty of Humanities, Department of International Communication)

でも参加できるカタチで提供する学習の機会のこと。」と示されている。

③ 家庭教育

家庭教育について、ウィキペディアでは、「・・・親がその子に家庭内で、言葉や生活習慣、コミュニケーションなど生きていく上で必要なライフスキル（生きていくうえでの技術）を身につける援助をしてやること。類似・関連語には躰（しつけ）がある。」と示されている。

授業では、テーマ決定の前に事前指導として、各分野の概略説明を行い、学生一人一人に教育課題に関する興味・関心について掘り起こした。そして、自分自身が、三分野のどの分野に意識がより高いのかを把握してもらいながら、学生自身でテーマを設定できるように行った。その後、更に分野毎に自身の追究課題を設定し、追究活動を行っていった。そして、最後に3回の報告会では、全員で共通理解を図りながら教育課題に関する認識を高め教育課題についての認識を深めることとした。

(2) 教育課題に関する学生の興味・関心の状況

受講者それぞれがテーマ設定する前に「学校教育」「社会教育」「家庭教育」のどの分野に興味・関心をもっているか、調査を行った。結果は以下の通りである。

(受講学生は19名)

- 学校教育分野：6名
- 社会教育分野：7名
- 家庭教育分野：6名

◎各自の設定したテーマ

<学校教育>

- 「沖縄県の不登校について」
- 「教員の労働時間」
- 「キャリア教育（生き方）」
- 「教員の人材不足」
- 「小学校外国語教育の在り方」

<社会教育>

- 「公民館と児童館の歴史・現状」
- 「自治体や社会教育の必要性」
- 「地域づくり（子ども会など）地域住民と子どもの教育に関する研究」
- 「子どもの体験と興味」
- 「企業事業と地域づくり」

<家庭教育>

- 「家庭間における性の認知、性教育」
- 「子どもの肯定感を高める家庭は学力が高くなるか？」
- 「家庭教育に関する父親の家庭に対する意識」
- 「親の接し方が与える子どもへの影響」
- 「規則正しい生活とは何か。今はどうあるべきか。」
- 「虐待問題」

(3) 分野毎の課題の追究

<学校教育分野>

学生Aのテーマ

「教員の人材不足・教員志望者減少の理由について」

(原因)

- ・人手が足りていない原因として、産休・育休取得者増加、特別支援学級の増加、病休者が見込みより増加、採用辞退者の増加、民間企業への流出、教職のマイナスイメージ等。

(改善策)

- ・教員の正規採用者数を増やす、業務量を減らす、教職の魅力のPR、大学などと連携し、教員養成塾等との連携強化等。

(考察)

- ・教員不足は必ず解決しなければいけない問題だと考えるが、財源など様々な問題があるので業務量を減らしたり、少ない教員数でもできる教育に切り替えていく必要がある。そして大切なのは、働き方を変えることではないか。

(他の学生の感想)

- ・教員の業務量を減らすことは大切だとは思

うが、その穴を誰がどのように埋めるかが今後大切になってくると思う。

- ・自分自身、教員を目指していたが、教員の長時間労働や給料がやっていることと見合っていないのが現状だと思うし、改善していかないと教員志望者が減っていくと感じた。
- ・民間企業に人材が流れていっている。働きがいがあるだけでは人材獲得にはならない。
- ・教師である親の話を聞いていると良いイメージの部分もあると感じる。

学生Bのテーマ
「小学校の外国語教育について」

(背景)

- ・日本語教育からみて、小学校の外国語教育の導入が早すぎると思った。また、日本人の日本語の能力は中学校で定着するので、言語として英語も日本語も中途半端にならないか考えた。

(学校現場の状態)

- ・小学校では、3年生以上から外国語活動として外国語を学習しており、主にローマ字を中心に勉強している。基本的には、書くことを基礎にしている。宿題には、ローマ字のプリントやドリルがあり、夏休みの宿題では、30ページにわたるローマ字の書き方、読み方の問題集が出されている。

(小学生へのインタビュー)

- ・(メリット) テレビや本などのローマ字綴りが読めて嬉しい。
授業でALTの先生とのゲームが楽しい。

(デメリット) 宿題が多く遊べない、
読めない、難しい

(まとめ)

- ・実際に学んでいる小学生は楽しそうに(英語学習を)やっているし、他の教科にも影響はないと感じた。宿題を通してても同級生同士での学力の差はまだ感じられないが、指導員としてできるサポートをしてい

きたいと考えている。

(他の学生の感想)

- ・私は小学生から英語を学んで欲しいと思います。母語すら定着していなのにと言いますが、生活ではずっと母語なわけだし、そこまで影響はないと思います。
- ・個人的には、アメリカ英語中心の教育を各国の英語に対応させるべきだと思います。
- ・母語の能力は、中学校で定着することを知り、確かに小学校英語学習の導入は早いかと思いました。日本の学習方法は、リーディング・ライティングがメインなので、スピーキングを増やすべきだと思います。
- ・中国における外国語教育の導入は、小学校1年生からなので、日本と比較するともっと早くなる。外国語は、ただ勉強だけでなく、使わないとしゃべれないと思う。
- ・小学生でも世界に挑戦している人もいて、外国語を使うことによって世界観が180度変わると思うので、自分の人生の変化につながる一歩として必要だと思う。

学生Cのテーマ
「ICT教育」

(ICT教育とは)

- ・教育現場において、情報通信技術を活用した取組みを指す。紙の教科書の代わりにデジタル教科書を活用したり、電子黒板や動画を用いた授業を行ったりすることは、ICT教育の一例である。全国の児童・生徒一人に1台のPCと高速ネットワークを整備する文部科学省の取り組みでGIGAスクールとも呼ばれている。

(メリット)

- ・学習の効率化→タブレット端末などで授業内容を共有することで、黒板の内容をノートに書き写す時間が減り、生徒が授業により集中できる可能性がある。
- ・教員の業務負担軽減→電子黒板やタブレット端末を使うことで、プリントを印刷することや教材を発注する手間が省けるため、

他の業務に時間を使える。

(デメリット)

- ・導入コスト→ICT教育を導入するための環境づくりには、電子機器の購入や通信環境の整備等に莫大な費用が発生する。
- ・導入ハードル→機器の操作や機材トラブルなど新たに覚えるが増えるため、不安を持っている教員も多い。

(まとめ)

- ・(ICT教育は)問題になっている教員の業務負担軽減につながることで、学習の効率化等メリットもあれば逆にデメリットになる部分も多いように感じる。しかし、デメリットであるところは国や自治体のサポートで解決できるということが今回の調査で分かった。近い将来、全国すべての学校がGIGAスクール化している可能性があると感じた。それに向けてICT関連の知識も身に付ける必要があると感じている。

(他の学生の感想)

- ・ICT教育のメリット、デメリットなど自分が実習に行って感じた事からICTは教育に必要なだと感じた。地域によって差があるので、そこを埋めないといけないと思った。
- ・ICT技術はこれからの時代にとって必要不可欠なものとなっていく中、小・中・高校生にネットマナーや機器の使い方など、これらから解決していかないといけない事がたくさんあると感じた。
- ・ICT教育の問題は、このまま教員になれば直面する問題なので少し詳しく調べてみようと思った。
- ・ICT教育が進むと今のような社会状況になっても対応することができるだろうと思った。
- ・ICT教育は、生徒にも親しみやすく、いい教育方法だと思った。ICTは良いとは思いますが、反面、それを活用する方法などを作成しないといけないので、業務負担にもなりそうだと思った。
- ・ICT教育が導入されることによって、効率が良くなった一方、スピードが求められる時代になったと思った。

学生Dのテーマ

「教員の労働問題について」

(労働環境)

- ・教員一人当たりの残業時間は、平均で月に96時間44分となっている。これは過労死ラインの月80時間を大きく上回っており、中学校教員に限定すると、平均120時間となっている。また、土日の出勤は当たり前で、「ほとんど毎週」と答えた人は、小学校で16.7%、中学校で74.5%、高校で52.4%となっている。
- ・「世界最長の労働時間」…経済協力開発機構(OECD)の「国際教員指導環境調査」(2018)によると、一週間の教員(小学校)の勤務時間は、参加した48の国・地域の中での平均は38.3時間だったのに対し、日本は参加国最長の54.4時間となった。

(教員の悩み)

- ・教材準備の時間がとれない、作成しないといけない事務作業が多い、部活動の指導が負担。

(解決策)

- ・部活動の外部、民間委託

*メリット

教員→部活の指導時間を授業準備に充てられる。業務効率化によって残業時間を削減できる。

児童生徒→専門知識を持った指導者からアドバイスを受けられ、活動の選択肢が広がり、一年間を通して複数の種目を体験できる。

*デメリット

民間委託による費用の工面。指導者や引率者などの人材確保。

「専門職員の例」→部活動関係、PTA活動に関する業務、書類作成業務、登下校指導、清掃指導、児童生徒の生活指導、保護者からの要望や苦情対応。

(感想)

- ・教員の労働時間について、調べてみると、本当に多くの問題点が浮かび上がってきた。特に、時間外労働の問題は深刻で、多

くの教員がぎりぎりの状況で働いていることを知った。また近年、教員を志す人も少なくなっていて、これからの日本の教育が本当に心配になってきた。先生や児童生徒のためにも、これらの問題は早く改善して欲しいと思った。

(他の学生の感想)

- ・部活動での土日の関わりなど、業務以外での長時間労働は早く解決すべきだと感じました。外部コーチへの依頼に関しては専門性の高い人をお願いすることで、教員側にも学生側にも良い点しかないで、優先的に予算をつけるといいと思いました。
- ・残業時間が96時間以上で、その手当が4~5,000円というのがすごく割に合わないし、委託問題も難しく教員の目が届かないといろんな不安もあると感じました。
- ・教員の労働問題については、本当に深刻な問題だと思いました。特に、中学校と高校の教員に関しては、教材の準備や事務作業の他に部活動の指導もしなければならないため、土日も出勤していて休みもなく過労死してもおかしくない状況だと感じました。解決策として、部活動の外部、民間委託とありましたが、費用の問題と人員確保が厳しいという問題もでてくるので、地域の人たちの協力も必要になってくるかなと思いました。

<社会教育分野>

学生Eのテーマ

「青年会と創る社会教育と地域活性化」

(現 状)

- ・2018年のZ会による調査
子どもの放課後の過ごし方で最も多かったのは「習い事」
- ・2018年の子どもの遊び場所ランキング
1位：自宅 (92%)、2位：公園 (49%)

(課 題)

- ・放課後外に出て遊ばなくなっている。
- ・家、学校 (課外活動) 以外で過ごせる場所

が少ない。

- ・地域全体で子どもを育てる習慣が薄れてきている。

* サードプレイスの確立が大事！

第1の居場所は、家。第2の居場所が学校。第3の居場所は？ 家、学校、部活のループでは、家以外だと同年代の友達や学校の先生としか関わらずに狭い世界で生きている。これからグローバル化が進むからこそ多様な人とのコミュニケーションを図る「世代を超えた繋がり」が大切である。

(青年会がすごい)

- ・「青年会」とは、10代~30代の人々が地域ごとに集まっている集団。活動としては、伝統芸能エイサーや地域の清掃活動、交通安全運動、地域行事への参加、中・高校生においては、更生の場にもなっている。

(幅広い世代と子どもたちを繋ぐ)

- ・青年会が中心となり、子ども会や老人会(婦人会)と一緒にバスツアーを行ったり、地域の子どものエイサーを教えるなど、性別や世代を超えた繋がりを持たせてくれる。

(まとめ)

- ・子どもが広い世代の目に触れられるようになり、地域で子どもを育てる仕組みの構築に繋がる。
- ・エイサーを通して、子どもが自分の地域に誇りに思う。
- ・その他、地域貢献活動を通して、様々な人と出会うことで子どもにとっても良い連鎖が生まれる。

(他の学生の感想)

- ・サードプレイスという第3の居場所の活用で家、学校以外で過ごせる。その中で青年会を活用することによって、地域の活性化だけでなく、世代の違う人と関わるため、人が育つという青年会の活動に、以前の青年会はヤンキーの集まりという考えが変わってきた。

- ・子ども達のサードプレイスとして青年会がすごく良いと知りました。青年会の活動は、不良の更生や世代を超えたつながりが持て

るので地域全体で子どもを育てていける場になると思いました。

- ・青年会の凄さを感じました。いろいろな活動があって自分が知らない所でも活動しているのを知って、こういう所で支えてもらったり、手助けしてもらっているということを知って、良さをたくさん知ることができました。
- ・発表を聞いて、本当に沖縄の文化などが好きで、調べて考えているのだなと感じました。自分はあまり考えたことのないことをたくさん発表していたので、なるほどと感心しました。
- ・スマホの普及で放課後は、自宅にいたことが多く（子ども）サードプレイスが大事という提案なので、わかりやすくすぐに理解できた。自分が好きな事だから楽しそうに発表していてエイサーが好きなことがよくわかった。青年会の詳しい活動内容が分かった。
- ・青年会のことを初めて知りました。青年会は、地域社会に多く貢献しているので、非常に素晴らしい組織だと思いました。
- ・青年会があるだけで、子どものストレスは大きくなることのできるのではないかと思います。

学生Fのテーマ

「離島の人口減少に伴う少子高齢化と伝統行事による地域活性化」

(テーマ設定理由)

- ・他県と比べて独自の文化が強い沖縄県やその離島では、毎年、人口減少と同時に少子高齢化も進んでいる。私は他県の出身だからこそ、沖縄県の独自の伝統行事や文化が失われていくことはもったいないことだと感じた。そこで、沖縄の離島に着目して、伝統行事による地域活性化について考えてみる。

(人口減少)

- ・リゾート地として人気の高い離島だが、地

理的には、四方を海に囲まれ文化圏からも遠く離れているために必ずしも快適とはいえない。離島には、経済面でも環境面でも満足に働ける場所が少ないことや、そもそも知名度の低いところもある。離島を持つ県は、沖縄県以外にもあるが、沖縄の離島には他県に比べ距離が離れているため支援などが難しい。しかし、離島の中でも宮古島や石垣島は沖縄出身のタレントの活躍やテレビドラマの放映による、いわゆる「沖縄ブーム」の追い風もあり、観光客数の増加やセカンドライフを過ごす場として移住してくる人も多い。

(離島の主な伝統行事)

- ・ムシャーマ、小浜島結願祭、伊良部トーガニー祭り、西表島節祭、黒島豊年祭
- ・多良間の八月踊り、クブラマチリ、ウラマチリ

(島内問題)

歴史ある行事にもかかわらず、島の中でも役員不足に悩まされている。例として、与那国島では島内の集落ごとに「座」というものがあり、これが中心になって伝統行事やその継承が行われてきたが、「座」自体が役員不足になっているという状況にある。

(考察)

どの伝統行事にも歴史があり、継承されてきたのは理解できるが、内容自体は牛や馬の繁殖祈願のようなものが多く親しみやすいものではない。

(研究しての感想)

色々な企業やメディアなどとコラボや、キャンペーンを行なったりしているが、相手側が沖縄の企業やメディアだったりするので沖縄県内でしかまわらない。地域活性化に向けて取り組むのはとてもプラスなことだが、やり方を少し考える必要があると強く感じた。伝統行事を体験しに行こうと思っても車ですぐに行けなかったり、情報があまりなかったり、細かい理由を挙げていくときりがないほど出てくる。そのため地域活性化というのはとても厳しい状況だなと強く感じた。

(他の学生の感想)

- ・離島はどうしても距離があるので、行き来が難しい状況にあり、また環境の面から日々の生活が厳しいという点で人口が減少しているということがわかりました。沖縄の行事ではあるが、離島の行事を全く知らないで沖縄だけでなく、県外にも広めることで離島の活性化を目指すことが可能ではないかと思いました。
- ・沖縄の離島の人口減少を伴う少子高齢化については、私たちは考えなければならぬ問題だと思いました。
- ・離島の主な伝統行事で全然知らない祭りや行事がたくさんあった。そして沖縄同士で魅力を伝えあっても活性化しないということに納得しました。
- ・沖縄の方言を話す人がどんどん減ってきていて聞くこともあまりなくなっているの、そこに着目しているのがよかった。
- ・離島の人口減少の原因は、高校や大学が少なかったり、なかったりすることもかなり大きい影響を与えていると感じた。

<家庭教育分野>

学生Gのテーマ
「家庭での性教育」

(課題点)

子育て世代の8割が家庭での性教育を行っていない。

- 家庭内での性教育の仕方がわからない保護者が多い。
- 保護者が性の多様性をどう教えるのか。
- 性被害者、加害者を生まないための家庭での性教育。

(日本は性教育が遅れている)

- ・2009年ユネスコ世界保健機構が『性教育の開始年齢』が5歳だと発表している。
→そう考えると少し遅れていることがわかる。
- (世界の性教育事情)
- ・ドイツ→小学校5年生で避妊などを生物の時間に学ぶ。

- ・韓国→小学校5年生で性暴力の被害にあった時の相談場所などを教える。
- ・イギリス→性犯罪予防の子ども向けアニメを作成。
- ・フィンランド→中学校で性器について、高校では不妊治療やLGBTQについて学ぶ。
- ・日本では、「性=恥ずかしいもの」という認識が強いため、教える側も躊躇してしまうケースが多い。

(まとめ)

- ・親世代でも性教育を受けずに育った人が多いため、まずは子ども向けの教材から取り組んでみる。難しい本などを読むよりわかりやすく、子どもに伝える際にそのまま伝えられる場合もあるため。
- ・普段の会話の中に「性の多様性」についても交えながら話してみる。

(他の学生の感想)

- ・「性教育」といってもその種類は幅広いものだと思います。より多様になっていく性について意識をしていきたいと思いました。
- ・大人が子どもに教える方法だけでなく、大人もどう学ぶかも述べていてよかった。
- ・大人も子どもも一緒に考えることで性教育から逃げずに向き合うきっかけになるのかなと思いました。

学生Hのテーマ

「親の接し方が与える子どもへの影響」

(虐待)

- ・虐待で十分な食事を与えてもらえず、栄養が不足していて発育が遅れたり、保護された後も十分な食事をとっていても養育者からの愛情を受けなかった心理的影響で発育が遅れることがある。

(知的発育の遅れ)

- ・頭を殴打したりなどの暴力で知的発育が遅れることや虐待を受け続けたことにより幼少期の好奇心を満たす「遊び」が暴力的に抑圧されるために知的発育が遅れることもある。

(非行にはしる子ども)

- ・親から虐待を受け続け、4～5歳頃の子どもが家にいたくないために家出や徘徊をするようになったり、親の影響で暴力的になり、問題行動を起こすことや自殺を図ったりすることがある。

(虐待による負の連鎖)

- ・精神的に問題を抱えるケースや子どもの健康、発達に問題があって子育てが難しい環境のため、親が精神的に余裕がないことが大きな原因だと考える。

(まとめ)

- ・各家庭で家庭環境や親が受けてきた教育によって子どもが受ける教育もそれぞれ違うことが分かったが、家庭教育で大事なものは親と子どもの距離感やコミュニケーション、親の精神面が大事だと感じた。

(他の学生の感想)

- ・虐待の問題はよく聞かすが、親が子ども時代に同じような経験をしている人が多いことを初めて知った。また教育の問題点として「早期教育」「過保護」は子どもの自由を奪ってしまうことを知った。
- ・ストレス社会の中で親も子もストレスがたまる。
- ・各家庭環境にもよるとは思いますが、どのくらい家庭教育のことに口出ししてよいものかがわかりません。まずは、子どもが何をしたいのかを優先させて行動を心がけようと思います。

4 報告からのまとめ

今回の報告は、「学校教育」「社会教育」「家庭教育」の現代の課題について学生の中から見た現状とそのことに対する自分の考えをまとめた報告となった。報告を終えて、まず感じたのが、分野は異なるが様々な教育問題に興味・関心をもっており、そのことについて真剣に改善していきたいと考えている学生が多いことに驚いた。特に、他者の発表を自分事として捉えていることである。今後、持続可能な社会を構築するために必要なことである。